

山口誓子

季語隨想

桜楓社

季語隨想

山口誓子

桜楓社

季語隨想

定價一八〇〇円

昭和六十二年九月一日
昭和六十二年九月五日
初版印刷
初版發行

著者

山口誓子

發行者

坂倉良一

發行所

株式會社 桜楓社

101

東京都千代田区猿樂町二一八一三
電話(〇三)二九五—八七七一(代)
振替口座東京六一一八〇二〇

曉印刷株式會社

檢印省略

ISBN4-273-02194-3 C0092 ¥1800E

李語隨想

目次

一月

初詣… 9
 恵方… 16
 初と始… 20
 元旦… 21
 若水… 24
 お屠蘇… 24
 お飾… 25
 お年玉など… 26
 食積… 27
 嫁が君… 27
 初夢… 28
 正月の遊び… 29
 七種粥… 30
 櫛… 31

二月

立春… 35
 雪… 35
 残雪… 36
 雪崩… 37
 流水… 38
 薄氷… 39
 梅… 40
 海苔… 45
 白魚… 47
 鶯… 48
 山焼… 50
 針供養… 51

三月

風・霞… 55
 山笑ふ… 56
 雛祭… 57
 つくし… 60
 菰・蒜… 60
 啓蟄… 60
 鳥帰る… 61
 畑打… 61
 げんげ田… 62

四月

麗か… 67
 蜃気楼… 67
 櫻… 69
 松の花… 72
 柳… 73
 チューリップ・ヒヤシンス… 73
 蝶… 74
 出代… 75
 子供の遊び… 76
 春の餅… 78

五月

六月

卯……81 牡丹……82 薔薇……84 筍……85 蔞……86 朴……87 菜殻火……88 轉……90 繭……91
端午の節句……91 葵祭……94 夏祭……95 田搔……96

七月

五月雨……101 紫陽花……103 萍……105 蜜柑の花……106 らつきよ……107 蛭……107 守宮……109 田植……109

炎天……115 片陰……116 夕立……117 雪溪……118 山開き……119 キヤムプ……120 日傘・甚平……121 扇……122
ところてん……122 醬油作る……123 梅干……124 瓜……125 向日葵……126 蟬……126 くらげ……127

八月

秋……131 七夕……131 稻光……134 天の川……134 流星……135 お盆……136 送り火……138 燈籠……139
お中元……140 西瓜……141 赤のまんま……142 蛸……142

九月

颯風……145 月……148 夜長……150 震災忌……150 鬼灯……153 龍胆……154 曼珠沙華……154 吾亦紅……155
穴惑ひ……156

十月

天高し…161 秋の声…162 案山子…163 薫塚…165 秋の果物…165 柿…166 林檎…168 桃…168
 栗…169 団栗…169 葡萄…169 蜜柑…170 菌…171 身に入む…172 紅葉…172 秋の七草…173
 虫…176

十一月

神無月…181 木枯…182 時雨…184 蒲団…184 七五三…185 報恩講…187 酉の市…187 神農祭…188
 芭蕉忌…188 木の葉髪…189 大根引…190 蓮根掘・蒟蒻掘…192 鷹…192 山茶花…193 石蓐…194

十二月

師走…197 雪囲ひ…198 冬座敷・炭・懷炉…199 神楽…202 大根…203 葱…204 鋤焼…205
 河豚鍋…206 水鳥…206 クリスマス…207 歳晚…209 もちつき…210 除夜…210

季語かれこれ

夏の季語…215 心の歳時記…220 紙漉き…231

後記…235

季語隨想

一

月

初 詣

志摩のホテルで越年する私は、年の始めに伊勢神宮に詣でるのを恒例としてゐる。

以前は、志摩賢島から磯部まで行き、そこから左へ岐れて伊勢道路を神宮へ行つた。その道路には逢坂峠があつて、今はトンネルで潜つてしまふが、昔はその峠を越えた。人力車の便もあつた。的矢・磯部の人々はこの峠を越えたのである。

ところが、パールロードが出来てから、私は磯部から右折して、パールロードの新しい道を通つた。その道路は山道であるから、右手に的矢湾を見下し、その湾口を挟む安乗崎と菅崎を見て走る。

国崎くさきの上を過ぎてから、左手の山の上に鳥羽展望台があるから、そこに立寄る。そのセンターの前に私の句碑が立つてゐる。

差し出でて崎々迎ふ初日の出

東の海から初日が出て来ると、それを伊勢の海岸の国崎、菅崎、安乗崎、遠くは大王崎の崎が、初日の方へ差し出で、乗り出して迎へるのだ。

それだけではない。展望台は国崎の上になつてゐるから、そこに立つ人々も初日を迎へるの

だ。

その高台は、昔、狼煙^{のろし}を揚げてゐたので、狼煙台といはれて来たが、狼煙の無くなつた今日では、そこを「初日拝所」といふべきだ。

私は志摩のホテルで、初日を拝んだが、この句碑の前に立つと、崎々と一緒に初日を迎へる厳肅な氣持になる。

初詣を志す私は、自分の句で自分の心を淨めるのである。

展望台を下りて、パールロードを鳥羽の方へ走る。石鏡^{いじょう}の上を過ぎ、今浦の大橋を渡つて、鳥羽を過ぎ、二見を過ぎ、一六七号線から左へ折れて内宮へ向ふ。

内宮へ詣でると、私はいつも倭町の春秋園に立つてゐる私の句碑の句を思ふ。

日本がここに集る 初詣

日本人全体が伊勢神宮に参集し、神に感謝してゐるのだ。

何時だつたか初詣のとき、擦れちがふ自動車の県名を注意して見た。遠いところでは九州ナンバーの車があつた。

自動車は遠い県から近い県から伊勢神宮をめざしてやつて来たのだ。

近い県の車の前には正月の輪飾がしてあつたが、遠い県の車にはその飾がなかつた。その用

意が無くて走つて来たのだ。

宇治橋の手前で車を下り、宇治橋の方へ歩いてゐるとき犬を連れた人がやつて来た。犬も主人と共に初詣に来たのだ。犬は神宮のどこまで入ることが出来るのだらうかと思つて見てゐると、犬は警手に阻止されて宇治橋を渡ることを許されなかつた。主人は犬を曳いて引き返して行つた。

私は神宮から出版された「参宮の栞」（昭和六年刊）といふ本を所蔵してゐる。それに一般参拝者心得が書いてあつて、心身清淨のことが強調されてゐるが、動物のことは何も書かれてゐない。犬は神域を穢すものとして当然除外されてゐるのにちがひない。

初詣をしようとする犬を見たので、その犬のために、一言記して置く。

神楽殿を過ぎると五丈殿がある。御遷宮に出仕した私は、五丈殿で直会をいただいた。それ以後そこを通るたびに、その殿の地面に眼をとめ、御遷宮のときのことをまざまざと思ひ出す。そして大前に進んで拝礼する。

宇治橋を渡つて右に折れ、表参道を進む。第一鳥居口御橋を渡ると第一鳥居。それを潜つて左へ折れ、第二鳥居を潜つて暫らく進むと、大麻授与所のところが、表参道と裏参道の十字路になつてゐる。右は風日祈宮への道、左は裏参道。初詣を終つた人々はそこで曲つて、宇治橋へ帰る。

十字路から御正殿へ進む参道では、往く人と還る人が擦れ違ふ。

私は、擦れ違ふ大勢の人々の敬虔な顔を見る。そして、この人々は日本全国から来たのだ、日本全国の人々がここに集つてゐるのだと思つた。

千木の先頭^づに戴きて初詣

参拝のときは、石段を登つて板垣御門を入り、外玉垣御門の前で拝礼する。

御門の千木の、水平に削いだ先が私の上にあるので、それを頭に戴いて、恭々しく拝礼する。御正殿の上には初御空があつた。

殿の千木は水平切りであるから、その千木を開ききつて初御空を享けとめてをられた。

石荒き御垣内まで初詣

私は、いつも初詣のあと宿衛屋で参拝者名簿に署名し、許されて御垣の内に入る。

御垣の内に敷いてある石は荒い石である。その荒石をしづかに踏んで、中重御鳥居まで進むのである。

黒砂利を白砂利に入り初詣

御垣内は、はじめ黒い砂利の間を通つて、左へ折れ、中重御鳥居に直面する。

そのあたりは白い砂利の広い場である。私は、黒砂利の間を通つて、白砂利の中に入ったのだ。黒から白に入つて全身を浄められた。

御 帷とばり の 裡うち に 御 光ひかり 初 詣

中重御鳥居の向うに内玉垣御門がある。

白い御帷が垂れて裡は見えぬが、その白い御帷が白く光つてゐる。

それは、御門の内に太陽の光線がさしてゐて、それで白く光つてゐるのだ。

太陽の大御神の白い御光を、御帷を透して私は拝んだ。

白 帷とばり 神 へ め く れ る 初 詣

内玉垣御門の白帷を拜んでゐるとき、御帷が風に吹かれて内へめくれた。

この御帷は垂れて内を見せしめなかつたが、それがめくれたので、内をすこし見ることが出来た。

私は、それだけ神に近づけたと思つた。かたじけないと思つた。

床 高き殿に眼をやる初詣

参拝を終つて、退下する道の右手、忌火屋殿の奥に床の高い殿が見えた。私は、その殿に眼を注いだ。

御稻御倉みしのみくらと申される殿で、御神田の稻を納める御倉であり、その守護神が祀られてゐる。

その殿の建築様式は高倉造りである。それを見ると、古代の高倉を想ひ、それが神の殿となつてゐるのをはつきり見たのである。

朝日新聞の新春詠に

初詣 神は五重いづの垣の内

誓子

といふ句を寄せた。「五重の垣」には説明が要る。

内宮の、正殿は神の在まします御神殿。その正殿を、瑞垣みづかき、蕃垣はんがき、内玉垣、外玉垣、板垣が囲うてゐる。神は五重の垣の内に在ましますのである。外宮には、蕃垣が無いから四重の垣である。私は、初詣を終ると接待館でその年の初詣の句を記帳する。

初詣の間私は句を作るために、心の緊張をつづけてゐるのだ。

昭和五十二年の初詣にもパールロードを通つた。